

2023 年度特別研究例会記録

日 時：2023 年 5 月 28 日（日）10：30～12：00

会 場：同志社大学今出川キャンパス良心館 RY305 教室

テーマ：図書館員から司書養成教員へ：研究の歩み

発表者：前川和子（桃山学院大学大学院特別研究員、前日図研理事、前大手前大学）

参加者：27 名

私のモットーは、3 つほどあります。1 つ目は、後悔しない事、2 つ目は、チャンス君に会った時、チャンスをつかめるように準備しておくこと、3 つ目は、自分の業績が求められた時、直ぐ出せるようにリストアップしておくこと、です。

10 代の頃、「後悔しない人生を送りたい」と思っていました。これはその後の人生でも、ずっとそう思ってきました。

2 つ目は、就職した時、上司の三宅興子先生から注1)「チャンス君」の話を聞きました。「チャンス君の頭はツルツルでね～、おでこに3本の毛しかないの。真正面からえらい勢いで走ってきて、捕まえたいと思ったら、手を伸ばして、その3本の毛を掴まないといけないのよ。チャンス君はえらい勢いで走ってくるので、一瞬のうちに掴まないでチャンス君は行ってしまうのよ。」そして、「向こうから走ってくる子が、チャンス君かどうかを判断するには、日ごろから掴める力(判断できる力)を磨いておかねばならない。」とおっしゃいました。それを、私はドキドキしながら聞きました。私にはその瞬間が分かるかしら？ チャンス君は私にとって、1 回かも知れないし、何回も走ってきてくれるかもしれないのです。このチャンス君の話は、大阪大谷大学を定年退職する時、最終講義で学生さんたちに話をしました。

3 つ目は、短期大学図書館員時代の図書館長さんだった、萼慧（はなぶさ あきら）先生が、しみじみした声でおっしゃったので、しっかりと受け止めました。ご自分の自戒をこめたお話だったので。

また私は、人生の一番の楽しみは、面白い方と出会うことだと思っています。この事も、今日のお話の中で出てまいります。

1 はじめに：三宅興子先生が上司

1967 年 3 月に、大阪阿倍野区にある大谷女子短期大学の家政学科を卒業後、母校の図書館員としてキャリアをスタートしました。阿倍野台キャンパスで 16 年間働きました。図書館員になった時の上司は、短大生の時の英語購読の先生だった三宅興子先生でした。

仕事が始まる前の 3 月に、タイプライターを家に持って帰って練習しなさいと言われてました。また、仕事が始まり、新人の仕事のオリエンテーションが終了してから、慶応義塾大学

通信教育課程に入学して、4年制大学の勉強をするように言われました。「図書館員はね、論文を書かないといけないのよ。その経験が無いと、文献を探す利用者の気持ちが分からないからね」と言われましたので、入学しました。

大谷女子短大は、16年後の1983年4月に富田林キャンパスに移転しました。こちらで6年間、短大図書館員として、計22年間過ごしました。

配布資料の後の【年譜】をご覧ください。
ざっと私の過ごしてきた道筋を申し上げますと、

その後、1989年4月同キャンパスにあった大谷女子大学図書館に異動になりました。4年制大学図書館員として、8年間過ごしました。

1997年4月入試広報に異動になりました。1998年の夏休み前に、1本のお電話が入り、1999年4月から堺女子短期大学司書養成課程担当教員になることができました。

2000年4月に大阪教育大学修士課程に入学し、2年後の2002年3月修了することができました。この勢いに乗って、

2003年4月に筑波大学博士課程に入学しましたが、仕事と家庭、親の介護があり、休学も含め最大ぎりぎり在籍しましたが、とうとう2012年3月に、単位取得満期退学となりました。

2005年4月、大谷女子大学（現 大阪大谷大学）の司書養成課程担当教員となりました。

2013年4月、大手前大学司書養成課程主任教員になりました。

2017年の前期で、教員の仕事を止めまして、リタイア生活に入ることにしました。

2018年4月に、桃山学院大学博士課程に入学し、2020年3月に修了し、博士を頂きました。

今日のお話の中心は、次の3つです。

問題提起

- 1) 図書館員として仕事をしながら、何故論文を書くことになったか。
- 2) その後どのように研究が広がったか。
- 3) どのように研究を深くすることが出来たか、出来なかったか。

私がどのように研究を続けてきたか（研究と言えるものではないのですが）を、お話いたします。

2 短期大学図書館時代の研究の芽生え：日本一の短期大学図書館を目指して

就職して1年目の夏休みに、図書館の仕事を理解するためと、資格を得るために、桃山学院大学司書講習を受講しました。職場からの出張扱いでした。当時の司書単位は15単位でした。その具体的な科目は、注2)の通りです。

就職1年目、すぐに4年制大学通信教育課程へ編入をするよう、三宅先生に勧められたこ

とは、すでにお話しましたが、就職した年の7月に手続きを終了しました。これが大変でした。私は大谷女子短大の家政学科でしたので、慶應義塾大学通信教育課程の文学部で認定してもらえた単位はあまり多くは無かったです。三宅先生も大谷女子短大の英語・英文学科を卒業され、慶応の通信教育課程を卒業されていました。私は8年がかりで卒業しました。

もう一つ言われたことがあります。図書館員は、2つ以上の専門職団体に入らねばならないと言われました。はじめに、日本図書館協会、そして、日本図書館研究会に入会しました。

<仕事と調査、そのまとめが研究へ>

私の願いは、日本一の短大図書館になることでした。日本一の短大図書館とは何か、ですが、利用者によく使われる図書館といえるでしょう。というのは、コレクションがフレッシュで、手に取りたくなる。学生がたくさん来館してくれる、貸出が多い、質問がたくさんあるという、図書館員にとり、学生・教職員に役立っているという実感がある図書館サービスを行う事です。図書館員は、知的なサービス業だと思います。

2.1 日本一の短大図書館になるために 1：アンケート、紀要へ投稿

図書館員の日々の勉強として、三宅先生から、『出版ニュース』（旬刊）、『図書新聞』『週刊読書人』『日本読書新聞』（以上週刊）の毎号に目を通すように、と言われました。もちろん、三宅先生はいつもご覧になっていました。

カウンターの下には、ウィンチェルが編集したレファレンスブックス注3）や、*Books in print* 注4）が置いてありました。実は、当時は難しくて意味がわかりませんでした。

図書館サービスを頑張っていましたので、貸出も含めて利用者、特に学生さんの反応が知りたかったので、アンケートを取りました。アンケート結果を、図書館の掲示板に貼りますと、反響がありました。そんなに大きくは無かったのですが、模造紙に書いて掲示するより、短大の『紀要』に投稿する方が（その当時『紀要』は学生さんにも配られていましたので）、たくさんの方に見てもらえる機会が増えると思いました。このことが『大谷女子短期大学紀要』へ同僚と共著での投稿に繋がりました。その頃は、投稿したいと申し込めば、紀要担当の教員はすぐに了承してくださいました。今なら、断られたかも知れません。また、出来上がった原稿を三宅先生に見せると、お忙しかったのですが、気軽にチェックしてくださいました。今でもありがたかったと思っています。

初めて同僚と共に書いたものが活字になった時の、何とも言えない感動、皆さまもご経験があるかと思います。

それ以後、毎年のように書いて、紀要に投稿しました。何故そんなに書いたかといいますと、利用者が図書館を気に入ってくれ、満足しているかどうかを知りたかったのです。私は日本一の短大図書館を目指していましたので、利用状況、どうすれば満足してもらえるか、など、いつも考えていました。

2.1.1 『図書館界』を読んで閃いた！

どうしたら利用者が好む図書館になれるか、いつも考えていた私は、ある夏の暑い日、『図書館界』を読んでいる時、ある論文に出会い、「これだ！」と思いました。河井弘志という著者がどのような研究者か、J.H.ウェラードがシカゴ学派の研究者であるとか、当時は何も知らなかったのですが、内容の面白さに惹かれ、自分の図書館で使えるのではないかと、使ってみよう、と思いました。この論文注5)を応用して、利用者のアンケートをとり、蔵書構成に利用者の興味を反映させたいと思いました。その結果、『図書館界』はとても役に立つんだと当時強く思いました。ついでにJ.H.ウェラードがどんな人かとか、シカゴ学派がどんな学派なのかということも同僚と学びました。

この河井弘志先生の論文との出会いが、私を未来へと導いてくれることになりました。

2.1.2 「清水福市賞」

以上の紀要への投稿や、普段の図書館サービスを評価して頂き、同僚と「清水福市賞」を受賞しました。この賞は、私立短期大学図書館の図書館員を対象にした賞で、当時の図書館長、萼慧先生の強いご推薦（状）のおかげもあって、受賞することができました。

清水福市という方は、大妻女子大学初代図書館長（1949.4-1970.9）として、私立大学図書館では大変有名な方です。後年私がF. チェニー先生のことを調べている時、F. チェニー先生は私立大学協会でも講演をされましたので、その時の依頼状などの書簡の中に、責任者であった清水福市氏の署名が出てきまして、その繋がりを知りました。

2.2 日本一の短大図書館になるために 2 : 改善要項に注目

短大・大学図書館の皆さまは改善要項をご存じだと思いますが、改善要項とは、各図書館のあるべき姿、目標を記述したものです。ナンバーワンを目指すには改善要項の中身と自分の図書館をチェックしてみて、改善せねばならないところを頑張ることだ、と考えました。日本私立短大協会の私立短大図書館担当者研修会は、当時毎年開催されていましたが、その研修会に出席しますと、その頃、先輩たちが盛んに私立短大図書館の図書館サービス、すなわち、改善要項の中身について議論されていました。私立短大協会は、1961年に改善要項を発表し、それ以後改訂版を出すための議論がされていたのです。

当時、国立大学図書館改善要項（文部省作成、1952年刊）、私立大学図書館改善要項（日本私立大学協会作成、1956、1968、1996年刊）、公立大学図書館改善要項（公立大学図書館協議会作成、1961年刊）、私立短期大学図書館改善要項（日本私立短期大学協会、1961、1974、1998年刊）、公立短期大学図書館改善要項（公立短期大学図書館協議会作成、1978年刊）が、検討され発表されていました。

その中でも私立短大図書館が一番熱心だときいています。私立短大図書館改善要項は、日

本私立短期大学協会で1961年に作られてから、1974年に改訂版、1998年版最新版を作っています。

私立短期大学図書館の改善要項については、特に「利用者援助」について、学会発表したことがあります注6)。

■私の意見:この改善要項もそうですが、日本図書館情報学会が創立50年に作成したLIPER(ライパー)など、図書館界の総意と言えるものを、共通して使い、改訂していくことは大切なことだと考えています。出来上がったものをそのままにするのではなく、それを様々な関係者が使用し改良していくことが重要で、図書館界の共通の資料(宝)とするべきだと思うのです。

ちなみに、LIPERは、「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する総合的研究」の略称だというのはご存じの通りです。

2.3 図書館サービスの様々な試み

図書館サービスの様々な試みを、私たちもしました。

2.3.1 貸出:この時代、私も貸出へ関心

1つ目は、貸出です。当時、私も貸出への関心がありました。貸出冊数を無制限にしました。その結果、貸出冊数は増大しました。貸出冊数を増やしたいと思ったら、制限をできるだけ除けばよいと分かりました。ただし、返却期限は2週間でした。貸出中心のサービスは、短大図書館の本当の目的では無いことを、この経験を通じて認識しました。

2.3.2 指定・推薦図書制度

2つ目は、教員の協力を得て、「指定・推薦図書制度」を始めました。また、予め用意されているレポート課題があれば、教えてくださいのように教員にお願いしました。指定・推薦図書のリストは、図書館報『ライブラリー』4月号に、毎年掲載しました。指定・推薦図書は一般の書架と別にして、指定・推薦図書コーナーを作りました。

指定・推薦図書制度は1970年度から始め、途中までは図書館報にリストを掲載していましたが、かなりサービスが広がったので、その後予算をもらい、独立した小冊子にしました。

2.3.3 レファレンスサービス

3つ目のレファレンスサービスは、難しかったです。簡単なクイックレファレンスは良いのですが…どのような質問も、利用者に親身になって取り組みました。しかし、難しい質問には実力が伴わず苦勞しました。アメリカ留学された教員の方に、「あなたたちからは、必ずしも欲しい情報は得られないけど、親身な対応・サービスはアメリカのライブラリアンに負けないわよ」と慰めて頂きました。

このレファレンスの教育のことですが、現在のことは知らないのですが、以前のアメリカの図書館司書養成コースでは、大量のレファレンスブックを学んで図書館員になったそうです。司書になるための勉強期間中に、たくさんのレファレンスブックを知り、覚え、テストされて、個々のレファレンスブックの評価も、できるようになることが必要とされていました。日本では、図書館現場で働きながら、という考え方もきくのですが（私の場合はそうでした）、そうではなく、その前の勉強中に、知るべきレファレンスブックの知識を吸収することになります。

添付しています 図 は、第2次世界大戦直後の慶応義塾大学文学部に開設された、日本図書館学校でのレファレンスブック教育のプリントの1枚です。日本図書館学校では、当時のアメリカの公共図書館員養成の教育と同じ内容が教育されていました。これは私の学位論文に使った資料です。ここには、辞書についての評価の観点が書かれています。

例えば、参考図書の評価には、著者、編集者、書名、出版者などごとに、信憑性、範囲、内容の扱い方、配列、図書の形状を見た上で、このプリントに書かれている諸点を、つまり、どの時代の言葉が扱われているか、語彙、各語はどのように扱われているか、については、綴、音綴の切り方、発音などについて、調べるようチェック項目が並んでいます。このような細かい分析項目で資料内容をチェックし、資料の良否を知り、それぞれの図書館に相応しい資料を選ぶことが教えられました。

これを見るまで、私はレファレンス教育の奥深さを知りませんでした。

2.3.4 図書館利用教育とその必要性

図書館利用教育とその必要性についてお話しします。

1) オリエンテーションの重要性

オリエンテーションの様々な試みについては、『図書館雑誌』に掲載された記事に書いています。注7)をご覧ください。この当時、スライドを使ったオリエンテーションを行っていました。

新入生へは、図書館を案内・紹介する配布物を4点用意していました。

- ・『学生便覧』に図書館の案内（図書館規程、利用規程、図書館利用案内）
- ・図書館報『ライブラリー』
- ・『ライブラリーガイド』（図書館利用案内）
- ・教員から学生への最新『指定・推薦図書リスト』

2) 図書館利用教育とその必要性

短期大学生は、2年間しかありませんので、特に早めの図書館利用教育が必要だ、と考えました。

そして、日本で初めて図書館利用教育についての、まとまった本が1989年8月に出版さ

れました。丸本郁子先生と椎葉倣子先生の『大学図書館の利用者教育』注8)です。私はこの本の書評注9)を書く機会に恵まれて、それが『図書館界』に掲載されました。この重要な本の意義を、私も熱く語っております。

私にとっての短期大学図書館

私の図書館人生の出発点は短期大学図書館でした。ここで、たくさんの栄養をもらったと思っています。小規模図書館ですので、図書館サービスのすべてを、一人で行った時期もありました。図書館サービスの深度は大してありませんが、サービス精神で全てを経験することができたと思っています。短期大学図書館での経験が、その後の私の土台になったように思います。能力があり、協力的な同僚のおかげで、小規模で、やる気さえあれば様々な試みことができました。失敗も沢山経験しましたが、成功体験も沢山あり、その後の図書館サービスを行う時の自信になりました。

ただ、研究に関しては、大したことはありませんでした。目的が日本一の短期大学図書館になるにはどうすれば良いか、だったからです。

河井弘志先生に「前川さんが正式な論文の教育を受けずに、書いていたのにはビックリした」と言われたことがあり、意味が分かっていなかった私は、その言葉に驚きました。研究とは何か、論文をどう書けばいいかを、当時分かっていなかったのです。

3 日本図書館研究会での研究活動

3.1 整理技術研究グループで志保田務先生に紹介された

話は少しさかのぼりますが、図書館員として少し慣れて、三宅先生も少し安心されたのか、いよいよ研究会デビューとなりました。図書館員になって3年目の冬に三宅先生に連れられて、日本図書館研究会整理技術研究グループ（以下、整理研究グループ、現 情報組織化研究グループ）に参加し、三宅先生は、真っ先に志保田務先生に私を紹介してくださいました。その記念すべき日のことが、『日本図書館研究会・整理技術研究グループ史』注10)という、35年史の16頁にしっかり残っておりました。この日は、フェリックス・ライヒマン著「ヨーロッパの図書館の目録」という論文紹介を、拜田顕氏注11)が発表されたのですが、そこで、また、大変なことが起こりました。三宅先生は英語の専門家ですから、次の英語文献の訳を引き受けられて、私に「一緒にやりましょうね」とおっしゃったのです。三宅先生と私の分担が決められ、締め切り日も決めて、その後、先生のお宅に行き、短大生時代の英文購読の授業のようなことになりました。

3.2 整理技術研究グループとは

この研究会は、当時関西ではナンバーワンの研究会で、あの有名な森耕一氏（1923-1992）注12)や志保田務氏（1937-）注13)といった研究者が集っていました。皆さまご存じのように、目録や分類が大好きな人たちの集まりだったのです。職場で使っていました、

『NCR1965年版』の批判が始まっていました。私もカード目録にタイプライターで Heading していましたが、例えば、基本カードを何枚も印刷して、書名カードにする時は、基本カードの一番上にタイトルを黒字のローマ字でタイプし、件名カードの時は、赤字でローマ字タイプしていました。印刷する「基本カード」が所定の位置に綺麗に印刷できていれば良いのですが、うまくいかず、上の方にずれている時など、狭い場所にタイプが上手に打てませんでした。この形、つまり上に Heading を乗せる形は、印刷が下手なのを棚に上げて、「何とかならないかしら」と常に思っておりました。そこへ記述独立方式に出会ったものですから、その理論がどうだこうだというより、見やすくスマートという観点から、記述独立方式の方がスマートで良いわ、と思いました。

日本の目録規則が西洋の影響を受けた著者基本記入方式から、記述独立方式へと変わろうとしている時期でした。

この時期、すなわち、私が就職した頃から、4年制大学図書館へ異動した頃の、この研究会の1968年から1989年頃の主な研究テーマを拾っていきますと、

記述独立方式論文及び反対論文の検討

記述独立方式による目録規則の策定へ

「図書館目録規則案」とNCR新版

印刷カードへの関心

分類への関心

NCR新版予備版の適用への関心

目録利用調査、逐次刊行物への関心

主題索引法への興味

書誌階層の検討、主題関係輪読の継続

シソーラス化を目指す入力、作成への挑戦と停滞

といった勉強を続けてまいりました。(現在私は、図書館サービス研究グループ(旧図書館奉仕研究グループ)で、研修を続けています。)

3.3 整理研究グループでの学び

3.3.1 グループ研究の面白さ

整理研究グループでは、グループ研究の面白さを経験しました。最初に経験したのは、印刷カード目録についての共同研究でした。新人の私も全体論文の中の2件を担当させていただきました。1件は先輩の蔭山久子さんと書きました。もう1件は一人で担当しました。担当といっても、どちらも志保田先生にチェック・修正をしていただきました。そんなに手を入れていただきましたのに、この研究結果が『図書館界』に掲載されたのを見た時、とても嬉しかったのを覚えています。

3.3.2 チェーンインデックスと2人の吉田さん：整研のグループ発表

チャンスを頂いて、2人の吉田さん（吉田暁史氏、吉田憲一氏）の研究に加えて頂きました。この論文は、2人の吉田さんの議論の賜物です注14）。お2人は素晴らしい頭脳の持ち主であり、大阪大学時代からの親友で、卒業後別々の企業に就職したものの、その仕事に飽き足らず、共に図書館員を目指したと聞いたことがあります。共に桃山学院大学司書講習を受け、共に整理技術に興味をもち、当時司書講習で「図書目録法」ご担当であった、木原道夫先生を質問攻めにした、ときいています。木原先生はずい分大変な目にあわれたのでは、と私は同情してしまいます。同じ時の司書講習トップ3は、両吉田と山野美贄子さんと聞きました。トップ3の話は、ずい分後になってから聞いたことです。そんなそぶりも見せない山野さんは、後の私の話に出てきます。陽気で楽しい方です。お楽しみに。

話は戻りますが、分類目録の件名索引というこのテーマは、私にとりまして、大変難しかったのです。必死に食いついたのですが、お2人の議論を傍で聞いているばかりでした。日図研の研究大会で、3人として発表し、その後論考化したものが『図書館界』に掲載されたのですが、私は自分の業績リストの中には入れませんでした。

しかし、何とか理解を続けまして、後に「情報資源組織法」を教えるようになった時、キーワード検索などの検索法と一緒に、様々な検索法が模索された時期、このような考え方の検索法があったことを、必ず説明するようにいたしました。この論文に名前を連ねて頂いた、せめてもの罪滅ぼしと思っています。

3.4 山田常雄氏とCRGグループ研究、LICS-U図書館システム

整理研究グループでの学びで忘れられないのは、1970年代から始まった図書館業務のコンピュータ化、図書館システムのコンピュータ化を学んだことです。整理研究グループでは、山田常雄氏注15)を招き、発表を聞きました。ここで私は、凄い方、山田常雄氏と出会うこととなります。

私が図書館員になった時、蔵書の検索方法はカード目録でした。利用者がカード目録で検索するには、先ほども出てきました、標目すなわちHeadingを必要としますが、そのHeadingはタイプライターを使用しました。この仕事でタイプライターは、必須アイテムだったので。カード目録の編成、並べる仕事は、大切な仕事だと分かっていました。三宅先生が、アメリカ留学で図書館を利用した時、専門職がする仕事だと聞いてきた、とおっしゃっていましたが、この編成作業は大変！辛い仕事でした。一生懸命に並べても、たくさんはできないし、その間利用者の対応もしないといけませんでしたので、カード編成に集中するのも大変でした。しかし、その後、山田常雄氏と整理研究グループで出会いました。

山田さんは研究会で何とおっしゃったか。忘れもしません、山田さんはこうおっしゃったのです。「僕はね。カード目録の配列が苦手なんです。配列をしないために、コンピュータ化をしたんです！」もう、コンピュータ化をするしかない！と私は心の中で叫びました。しかも自分が初めからプログラムを組むなど、すべてをする必要がなく、山田さんが開発したシステムを使おう、と決めていました。

その頃、短期大学図書館界では、小規模図書館だからこそ小人数の職場を補うために、とコンピュータ化が始まっていました。受入と会計のみのシステムでしたが、大谷女子短期大学図書館でも導入しました。短大図書館は、4年制大学図書館より、早く業務のコンピュータ化に取り組んだと言えます。

そして、その事が、幸か不幸か、私に4年制大学で図書館業務のコンピュータ化をするように、理事長からの指令が来ることになります。

ここで、少し話が変わります。

4 日本図書館協会での仕事ほか：図書館大会、アメリカ西海岸図書館の旅、私立短期大学図書館協議会設立、その他

今まで日本図書館研究会を中心にお話ししましたが、最初に入った図書館専門職団体の日本図書館協会では、図書館大会の幹事の仕事、つまり「短大部会」の仕事をして2回担当する機会がありました。どちらも大阪大会です。

1度目は、1977年、堺女子短期大学にいらっしゃった、整理技術の専門家の浅野十糸子先生を中心にして、6名が呼ばれ、私も入れて頂き、先ほど桃山司書講習2人の吉田さんと3人がトップの山野美贄子さんとの出会いでもありました。この会が終了した時、7名で自ら、「セブンビューティー会」と名付け、長い付き合いをしました。

同じ年、1977年に日本図書館協会主催の「アメリカ西海岸図書館の旅」に偶然、後の「セブンビューティー会」のメンバー仲井道子さん（奈良佐保女学院短大図書館）も、参加して楽しい旅になりました。この旅は、シアトルからサンフランシスコまでバスでハイウェイを走り、コンピュータ図書館業務化とそれを支えた書誌ユーティリティ、例えばOCLCが図書館で実際に動いているのを見学しました。この時のリーダー兼通訳をされたのが、長倉美恵子先生でした。帰国後、長倉先生は立派な報告を『現代の図書館』に書き記されています注16)。

仲井さんと長倉先生と私は、この旅をきっかけに仲良しになり、日図研の研究大会がお好きだった長倉先生を、毎年関西に迎えて関西のグルメ会をしていました。グルメ会以外の詳しいことは、「長倉美恵子：新しいアメリカ図書館学を学び世界と交流した研究者」注17)をご覧ください。

2度目の大阪での図書館大会は、1984年10月 私立短期大学図書館協議会近畿地区協議会の元理事たちで、実施しました。このあと、「短大会」というグループを結成し、今に至っています。

整理研究グループでの研究活動は、短期大学図書館員から大学図書館員へと異動になって

も続けていました。

私立短期大学図書館協議会の設立

1977年9月29日に、私立短期大学図書館協議会（以下、私立短図協）が設立されました。設立時、近畿地区の理事に若輩者の私が選ばれました。改善要項に出てきました日本私立短期大学協会は各短大の理事さんの団体で、この協議会は、短大図書館の団体です。

設立によって、近畿地区では1980年9月『近畿地区私立短期大学雑誌目録』を刊行しました。これは、丸本郁子先生の講演会の影響の下、作りました。丸本先生は短大図書館が利用者にサービスするには、連携せねばならない、そのためには各図書館が所蔵している資料をすぐ分かるようにしておかねばならない、とおっしゃいました（当時は、所蔵を電話で問い合わせていました）。私の次に近畿地区理事を担当してくださった瀬古輝子さん（帝塚山学院短大図書館）と私は、これを聞いて作ろうと決めました。瀬古さんも「セブンビューティー会」のメンバーです。近畿地区短期大学図書館協議会に参加してくださった、短大図書館のみなで協力して作りました。1981年12月には、その補遺版を刊行することができました。

この時代1980年代は、国立国会図書館がJAPAN/MARCを作っています。これは、ご存じの通り国立国会図書館が収集・整理した出版物について標準的な書誌情報を広く国の内外に提供する全国書誌の機械可読版です。1981年4月から頒布が開始されました。

コアなツールとして、『日本目録規則 新版予備版』（1977年）が、出版されました。標目を記述から分離し、基本記入を定めない記述ユニットカード方式という、新しい考え方に基づく目録規則です。先ほど整理研究グループが熱く議論をしていたものが、実現したのです。

さて、先ほどの続きとなります。

5 大学図書館員時代へ

そんな動き、大きな波が、楽しい短大図書館界から私を、大学図書館へと送り込むことになりました。

本学園の理事長といますのは、1970年の大阪万博で有名な左藤義詮氏の息子で、同じく政治家の左藤恵氏です。また、父君と同じ真宗大谷派の僧侶でもあります。その方が郵政大臣になりまして（1984.11-1985年12月）、電気通信事業法に関係したこともあり、『通信は時代を創る』を出版しました注18)。そして、彼は、コンピュータの時代が来ることを確信して、学園内のコンピュータ化にも力を入れることとなります。

当時大学図書館には、勉強家の課長さんがいました。図書館員9名を引き連れ、周りがコンピュータの研修を始めているので、そのうちの2名をコンピュータ係にして研修させていました。確かに、大きな大学図書館でもコンピュータ化がぼちぼちだった時代に、中規模の大学が導入するのは、かなりのリスクがありました。なので、課長さんは評価が定まった図

書館システムを将来決めて、導入するお積りだったのだと思います。

しかし、理事長は国立大学図書館の状況なども知っていたのかも知れません。出来るはずだと、思っていたようです。そういえば、うちの短大図書館では、小さな機械を使って始めているのではないか、というようなことで、「あいつにやらせろ」といったことになったようです。本部のトップのかた（事務局長さんではなく）から、ある会合の時に、こんこんと「あんたの役割は分かっているやろね」と言われました。

課長さんは事務局トップとして図書館を出られ、ゆっくりと周りを見てからね、という図書館員さん達の中に私は異動になりました。それと、経理のトップと大学の学長さんは、とんでもない大金を、これから大学として使うことになるので「あんた、理事長に、出来ません、と言いなさい」と学長室に呼ばれて言われました。

皆さまだったら、どうされましたか？

5.1 短期大学図書館員時代の総括

大学図書館に異動してすぐに、短期大学図書館員時代の総括として、短大図書館についてまとめ、学会発表をしました。その発表を聞かれた志保田先生の勧めで、内容を変えて、日図研の研究大会で発表しました。また、偶然『現代の図書館』からの依頼で、短期大学図書館のことを書きました注19)。

5.2 大学図書館での仕事

大学図書館での仕事は、先ほど申し上げましたように、まず、図書館業務のコンピュータ化をせねばなりませんでした。異動人事は、学園理事長の意向（図書館のコンピュータ化）であったことはすでにお話しました。大変な仕事です。

しかし、整理研究グループで研修をしていたおかげで、山田常雄さんが NEC と開発した LICS-U をはじめ、様々なシステムを研修することが出来ていました。大学と学園本部には、いくつかのシステムの特徴の比較表など作って、提出しました。そして、私はためらいもなく、山田常雄さんの LICS-U を導入しまして、同僚と職場のコンピュータ化ができました。しかし、ご存じのようにカード目録を遡及入力しなくてはいけませんでしたので、コンピュータ化は大変でした。関西の女子大学図書館で最初の業務のコンピュータ化だと言われました。

もう一つの大きな仕事がありました。別館書架の増築でした。電動積層書架を導入しました。当時まだ珍しい書架でした。書架を増築し、図書館全体の図書を移動しました。かなりハードな仕事でした。

そして、図書館利用教育に取り組もうとしましたが、コンピュータを導入したら、すぐに図書館員を減らされました。

<外部の仕事>として、

日図研のお知り合いから、大学図書館の方は良くご存じの雑誌『大学図書館研究』の編集委員

がまわってきました。今でも年賀状をやりとりする、面白い方とお知り合いになりました。

司書を守れない大学図書館

大学図書館から入試広報室へ、異動することになりました。図書館から他部署への異動は、なぜでしょうか？ ずっと考えてきたように思います。自分だけでなく、様々な方が他部署に異動させられるのを見ました。私の場合、短期大学図書館員を守る法律が無いこと、大学図書館員を守る法律がないのです。

6 司書養成課程教員

6.1 堺女子短期大学司書養成課程

入試広報室職員から教員になれたのは、お2人の先生からチャンスを頂いたからでした。短期大学図書館員の時代から、志保田先生の桃山学院大学司書講習の講師として、30代の頃から働かせてもらうという機会を頂いていました。実務を語ることはできても、その理論的な面では大変で、図書館員の時代から猛勉強をせざるを得ないという経験をしてきました。初めて本職として、司書課程の教員になりましたので、1年目は更に必死の講義ノート作りをし、その後はノートの更新に励みました。

なぜ、教員になろうとしたのかといいますと、その当時図書館員に戻る可能性はありませんでした。しかし、教員になって良かったことは、図書館員の時は待たなしの実践の毎日でしたが、ゆっくり勉強できる時間ができたことです。必死の講義ノート作りも大変でしたが楽しいことでした。そして、2年目から大学院修士課程に進みました。ワクワクしました。

大阪教育大学社会人修士課程へ行きまして、塩見昇先生に師事しました。マスター論文のテーマは、「インフォピープル・プロジェクトにおけるトレーニング事業の意義」というものでした。その内容は、インターネット時代に入った時に、アメリカ図書館人が行った一斉再教育のプログラムと、そのムーブメントを調査・分析したものでした。カリフォルニア州の場合を取り上げています。

情報化時代において日本の図書館員を考える時に、役に立てればと考えました。そして、今でも大切なテーマだと考えます。

4年制大学図書館時代に、同僚と共に図書館業務コンピュータ導入の経験をしました。この時代の図書館員はどうあるべきか、ずっと図書館員だった人たちのリカレント教育はどうするのか？ 今後は利用者が図書館員よりコンピュータを良く知っている可能性がある時代に、図書館員の能力とは何かを知ろうとしたのです。アメリカはクリントン大統領とゴア副大統領によって先行していたので、カリフォルニア州を例にして、アメリカ公共図書館員がどのようにリカレント教育を自ら一斉に行い、時代にあわせて変わろうとしたかをまとめました。

コンピュータ時代の日本における図書館員のリカレント教育

アメリカの場合、各州からの連邦政府への強い要請の結果、各州立図書館が連邦政府からの補助金の窓口になり、各州では公共図書館員のリカレント教育を行うことになりました。

日本の場合、アメリカのような全体的に変えていこうとするための政府からの補助金、図書館員側から政府に対する強い補助金の要請はありませんでした。日本では、図書館員全体の、インターネット時代に対応できるための力をつけるというリカレント教育、日本国内全体のムーブメントといえるものは起こりませんでした。インターネット時代に、インターネットやデジタル資料等の知識をつけるためのリカレント教育は必要です。それを行なうための、多額のお金も必要です。この情報化時代に、国としての方向性を持ち、予算化して、図書館員をそのために能力をつけて働いてもらう、という話も起こりませんでした。

これは、世界の流れから言うと大変無防備な状態、といえるのではないのでしょうか。

『図書館界』「座標」注 20) にも書かせてもらいましたが、私はこのような状態の日本を見ると、足元が震えるような未来が見えるのです。

ちょっと、ここで、

第 11 回 TP&D フォーラムのこと

堺女子短大教員時代で忘れられないことを、お話します。1991 年から始まりました「TP&D フォーラム」は、情報資源組織化の世界では現在も続く、有名な人気の合宿勉強会で、田窪直規さん注 21) が言い出しっぱだったということは、ご存じでしょうか。ある日整理研究グループの集まりの後、「こんなのはどうや」と提案され、そこにいた私たちは「いいね〜！」と賛同して始まりました。田窪さんは「ちょっと良いホテルで集まって、夜通し整理技術のことを議論しよう」と、旅館ではなく、ホテルとおっしゃいました。すると、私の頭の中は、湖のそばの、少しゴージャスな素敵なホテルに集まっているのが浮かびました。私ももちろん賛成しました。しかし現実には、とてもそんなロマンティックなものでは無かったのです。

TP&D フォーラムは、新しい情報資源組織化の世界がバンバン入り込んでくる、刺激的なフォーラムでした。その 2001 年第 11 回注 22) に、私にも実行委員長がまわってきました。1 泊目の夜は恒例の懇親会で、実行委員長が開幕の挨拶を致します。私は、たくさんの方が集まってくださったフォーラムだったので、大勢を前にして Ladies and gentleman と呼びかけ、すぐに日本語で挨拶を始めました時、会場から「英語で続けろ！」と叫ぶ声が聞こえました。原田勝先生注 23) の間違いなお声でした。TP&D フォーラムの夜通し議論では、若手に議論をふっかけ、大いに盛り上げておられました。

6.2 大谷女子大学（現 大阪大谷大学）司書養成課程

2005 年 4 月に大阪大谷大学教員・司書養成課程主任として、古巣へ戻ってきました。大阪大谷大学では、3つのことに取り組みました。

<大阪大谷大学での 3つの取り組み>

6.2.1 図書館学生インストラクター制度

図書館学生インストラクター制度を、当時の図書館長さんと、古い馴染みの中道厚子先生とご一緒に作りました。しかし、司書課程在籍の学生さんのためのプログラムですので、私を中心になりました。丁度その頃、大阪大谷大学の近く、河内長野市に丸本郁子先生がリタイア後お住まいになっていたのので、顧問になって頂き力を貸して頂きました。

図書館学生インストラクターとは、司書養成課程の3, 4回生を対象に、特別のプログラムを作って養成するものです。丸本先生はパスファインダーを作成できる力を持つことが大切だと言われました。早速、パスファインダーを作れる力を、夏休みや春休みを使って、学生を集め、一生懸命に養成しました。そして、図書館と話し合っ、専用デスクを置いてもらい、下級生にサービスが実施できるようにしました。

さらに、司書養成課程の新しいカリキュラムに、選択科目として、パスファインダーを作成する科目を入れました。

6.2.2 図書館実習の重要性：共同研究

図書館学科協議会での出会いによって、共同研究を行うことになりました。図書館実習の実態調査（横山桂先生、中道厚子先生、川原亜希世先生と。当初は馬場俊明先生もご一緒でした）と行いました。

全国の司書課程に悉皆調査を行なったり、図書館実習を積極的に行っている司書課程主任の教員にインタビューにも行きました。文科省の補助金を上手く取れずに、ほとんどメンバーのポケットマネーで行いました。

その成果を論文としてまとめ、公表しました。

その総まとめと言えますのが、『図書館実習 Q&A』という図書です。注24)をご覧ください。図書館実習に必要と思われる書式を作成し、自由に使って頂くために、日本図書館協会のホームページから、無料でダウンロードできるようにしました。この本の売上金は、日本図書館協会に寄付致しました。ただし、第2刷から印税を頂くつもりだったのですが、未だに頂くことは出来ていません。

6.2.3 大学院博士課程へ

短期大学図書館時代から図書館利用教育に力を入れていました。このことをもっと知りたい、学びたいと思い、大学院博士課程へ行きたいと思いました。修士を終了して翌年に、博士課程に進みました。

2003年に筑波大学の社会人入試の面接で、5人の面接の先生に囲まれ、テーマをきかれました。図書館利用教育について研究したい、と申し上げましたら、私も良く存じ上げている先生が「図書館利用教育は、熱心なやる気のある図書館員が、その図書館にいるかどうか、問題なんです。理論があるのか、理論化が可能かどうかでは無いのですよ。」と、キッパリとおっしゃったのが、印象的でした。鋭い問題を突き付けられまして、テーマについて悩み

ました。その結果、図書館利用教育は、レファレンスに含まれるものですから、まずレファレンスについて調べてみようと思いました。日本のレファレンスサービスは何時から始まったのか、と疑問に思いました。堺女子短期大学から大阪大谷大学に行ってから、片道5時間の筑波大学へ、頻繁ではありませんが通いました。

6.3 大手前大学司書養成課程

2013年4月大手前大学教員・司書養成課程主任として勤めました

大手前大学は、私がかつて、大谷女子短期大学で味わったことのある、文化的な家庭的な雰囲気でした。同時期に採用された若い3人の女性教員と仲良くなり、また、当時学長をされていたフランス文学バルザック研究で著名な柏木隆雄先生注 25) がいらっしやいました。ゼミ生の卒論指導をしました。「私の読書遍歴」を2回にわたって語ったことは、他の大学では経験したことのない、面白い企画であったと思います。これは学長の柏木先生のアイデアでした。

7 終活の始まり

7.1 集大成としての博士課程再入学

リタイア後、桃山学院大学大学院に筑波大学から山本順一先生が移られてきていましたので、山本先生に師事し、厳しくも暖かいご指導を受けて、2020年3月に山本先生のご定年と同時に、同じく山中康行先生（元京都女子大学）と学位を頂きました。

学位論文のテーマは、「F. チェニーの日本におけるレファレンス教育に対する貢献・影響に関する研究」です。このテーマのきっかけは、先ほどお話しましたように、日本のレファレンスサービスはいつ始まったのか、という素朴な疑問からでした。

F. チェニー（Frances Neel Cheney, 1906-1996）先生は、筑波大学の学長をされていた藤川正信（1922.4.13 - 2005.3.10）先生や、レファレンスサービスの教科書で有名な長澤雅男（1933.1.6 - 2018.3.11）先生の恩師であることが分かりました。

F. チェニー先生は、第二次世界大戦直後の慶応義塾大学文学部内にできた日本図書館学校で、レファレンスサービスを教え、図書館の仕事は利用者にサービスを提供することなのだという事を教えたのでした。フランシス・チェニー先生を調べるうちに、彼女が大好きになりました。なぜなら、彼女は図書館員として働きながら大学院で学び、ピーボディ大学教員になった方でした。レベルはかなり異なりますが、自分とよく似たキャリアだと感じたからでした。

7.2 私立短期大学図書館協議会への関り

短期大学図書館は私の原点です。短期大学は減少しました。従って短期大学図書館も減少しています。その理由は色々ありまして、短期大学が閉学したり、同じ組織内の4年制大学に吸収されたりしています。しかし、短期大学はまだ存在していますし、図書館もあります。

いまだに小規模です。職業教育と教養を担うという、4年制大学とは異なる目的をもつ高等教育機関として、まだ総ての存在意義を失ったわけではありません。時代と共に変化し、教育を受ける側の選択肢の可能性を残しています。

8 まとめにかえて、私が考える問題点

私が考えます問題点を、いくつか述べたいと思います。

8.1 「論文の書き方」を図書館員に

ここで、私の本音を語らせてください。私は正式な論文の書き方を学ばずに、同僚も巻き込んで論文を書き始めました。後に、河井弘志先生に「前川さんが正式な論文の教育を受けずに、書いていたのにはビックリした」と言われたことがあり、分かっていなかった私は、その言葉に驚いたことは、先ほどお話ししました。私は慶應の通信課程を受けたと、先ほどお話ししましたが、卒論指導をしてくださったドイツ文学で有名な深田甫先生注 26) からも、論文の書き方の指導を受けたわけではありませんでした。

ご存じの通り、論文のテーマや中身の分析と、実際に書くこととは別のことなのです。アメリカの大学では、書き方の正式な教育があり、卒業論文を書く時には、卒論指導の教員ではなく、個人的に指導してくれる方、図書館員や大学院生などが個々の学生に寄り添って教えてくれるそうです。図書館インストラクターを養成している時に、そのことを丸本郁子先生からお聞きして驚きました。丸本先生は、アメリカの大学で学ばれたご経験がありました。私は知らなかったのです。私は教員になって、ゼミ生に卒論指導をしましたが、テーマ、内容の指導と、その書き方の指導も致しました。日本の一般的な大学教員は、そうされているのではないか、と思います。でも、アメリカでは、指導教員は普通そのようなことはしないそうです。日本の教員は大変な仕事も担当されているのです。図書館で、学生に論文の書き方指導をしていますし、私も図書館員の時はそうしていました。論文の書き方については、『図書館の達人』などで、図書館員の仕事だと言っていますので、色々な本を読み自分で頭を打ちながら学びました。でも、大学でもっと親身に書き方を教えて頂いていたら（そのために大学に行ったのに）、もっと早くにまともな論文が書けていたのではと思います。

もし、今論文を書きたいが、今まで書き方の教育を受けたことが無いという図書館員がいらっしゃいましたら、正式な論文の書き方を学ぶ機会があればと願っています。日図研あたりが、図書館員のための論文の書き方指導ができれば、「現場からの提言」の原稿が、もっと増えるのではないかと期待しています。

8.2 現在図書館が置かれている環境：デジタル対応

コロナ禍で世界の図書館のデジタル化は進みました。アジアもかなり先を行っている国々があり、日本は遅れているといえるかも知れません。しかし、日本の図書館界は、その悪い条件の中でも頑張っていることは、save MLAK のホームページを見れば分かります注 27)。

4 年制大学図書館、短期大学図書館、公共図書館も、ホームページなどから頑張って情報発信されていることが分かります。しかし、まだまだなのは、皆さまもお感じになっているのではないのでしょうか。デジタル著作権の知識なども、必要性があると思います。これについては、アメリカで大きな議論になっていることなど、山本順一先生の最近の論文を、参照されると良いと思います注 28)。

これからの図書館員は、デジタルに対応できること、つまりまず知識として広範囲に知ること、できたら縦横に使えることが必要となります。知ることや使えることは、個人によって様々だと思いますが、図書館員として利用者にサービスする時に、困らないような力を、図書館界として模索する必要があると思います。そして、このことは図書館員全体の問題でもあるので、図書館員、すなわち正職員も非正規職員も、ともに取り組むべき問題です。

8.3 現在の図書館（研究）活動を行っている人たちを残したい

同時代の図書館界の人々をちゃんとした形で残したい、残せたらいいなと、思っています。何故残したいと思ったかといいますと、博論を書く中で、すごい人たちが歴史に埋もれていることに気がついたのです。力があれば、掘り起こしたいと思います。今、目の前にしていると、その方を客観的に見るのは難しいかも知れませんが、何が本物かを見定める目を養っていけたら、今からでも、と思っています。

8.4 図書館と図書館員を守るための法律

そして、付け加えると、図書館と図書館員を守るための法律に、私たちは注目すべきだと思います。私たち図書館とその関係者を守るのは、法律しかないと言い切れるのではないかと思います。「5.2 大学図書館での仕事」の最後、私は入試広報室へ行くことになりましたが、それは、守ってもらえる法律が無かったからです。これから様々な法律を作って行けるようにせねばならないと思います。

8.5 未来へ導いてくれた論文

『図書館界』に掲載された河井弘志先生の論文と出会ったのは、私が 20 歳台後半でした。まだクーラーがブンブン唸り声をあげている時代に、この論文を読み、この論文が私を未来へと導いてくれたと言えます。この論文との出会いで、私は長い長い道を歩んできた、と思います。

皆様もそんな、ご自分を未来に導いてくれる論文や人物に、会えることを、すでにお会いになっていることを、心より願って今日のお話を終わります。

ご清聴ありがとうございました。

【文責：前川和子】

注

- 1) 三宅興子 (1938-2022) 大谷女子短期大学を経て、梅花女子大学名誉教授。日本の英米児童文学の領域を開拓。元大阪国際児童文学振興財団理事長、国際グリム賞受賞 (2019)
- 2) 1967 (昭和 42) 年現在
図書館通論、図書館実務、図書選択法、図書目録法 (2)、図書分類法、レファレンス・ワーク、図書運用法、図書館対外活動、児童に対する図書館奉仕、視聴覚資料 10 科目 (11 単位)、選択科目：特殊資料、図書館史、社会学、ジャーナリズム、図書及び印刷史 5 科目 (5 単位)
- 3) Winchell, Constance M. ed. *Guide to reference books* アメリカ図書館界では、利用者にサービスするために図書館員が知っておかねばならないレファレンスブックス、として著名である。「ウィンチェルのレファレンスブックス」と言われ、日本でも有名だった。
- 4) *Books in print*, R.R. Bowker, c1967- 今注文すれば手に入る英語の本のリスト、すなわち出版書誌
- 5) 河井弘志 「J.H.ウェラードと図書選択論 上 下」『図書館界』24 (2), 1972.7, p.44-61, 24 (3), 1972.9, p.102-116.
- 6) 前川和子「短期大学図書館における『利用者援助』の問題」1994. 日本図書館学会発表
- 7) 前川和子「スライドを使った入学時オリエンテーション」(特集 オリエンテーションにひと工夫を)『図書館雑誌』82(4), 1988.4, p.207-209.
- 8) 丸本郁子、椎葉倣子『大学図書館の利用者教育』日本図書館協会, 1989.
- 9) 前川和子「書評 丸本, 椎葉『大学図書館の利用者教育』」『図書館界』41(5), 1989, p.243.
- 10) 志保田務編著; 吉田暁史[ほか]資料編成『日本図書館研究会・整理技術研究グループ史：戦後の整理技術研究の一断面』日本図書館研究会・整理技術研究グループ, 1993, 55p.
- 11) 拝田真紹 (1933-2006) 拝田顕は旧名。松原市民図書館長 (1978-1993)。整理技術研グループ世話人、日本図書館研究会編集委員長など。
- 12) 『図書館の話』至誠堂, 1969. S.R. ランガナタン『図書館学の五法則』日本図書館協会, 1981. 翻訳でありにも有名。当時、目録整理における記述独立方式の提唱の中心人物の一人。大阪市立中央図書館長。日本図書館研究会理事長。京都大学教授。
- 13) 当時、目録整理における記述独立方式提唱の若き旗頭。桃山学院大学名誉教授。現「図書館を学ぶ相互講座」主宰。I-LISS Japan 会長
- 14) 吉田暁史、吉田憲一、前川和子「分類目録の件名索引：連鎖索引法の NDC に対する適用とその問題点」『図書館界』35 (3), 1983.9, p.113-120.
- 15) 山田常雄 (1941-1988) 氏が有名な理由は、以下の訳書と論文によると考える。
J.ミルズ著; 山田常雄訳『現代図書館分類法概論』日本図書館研究会, 紀伊国屋書店 (発売), 1982.3.
山田常雄著「イギリス分類研究グループ (CRG) における分類理論の展開」『東京大学図書館情報学セミナー研究集録』19, 1982.
- 16) 長倉美恵子「変ぼうする目録形態とプロセッシング：米国西海岸図書館視察団報告 1 (目録の機械化<特集>)」『現代の図書館』15(4), 1977.12, p.212-214.
- 17) 前川和子「長倉美恵子：新しいアメリカ図書館学を学び世界と交流した研究者 (1933 年 1 月—2020 年

- 10月)』『Journal of I-LISS JAPAN』3(2), 2021.3, p.41-53.
- 18) 左藤恵『通信は時代を創る：距離と時間を超えて』ビジネス社, 1985.
- 19) 前川和子「短期大学図書館を取り巻く環境と展望」(特集 図書館をとりまく環境 1)『現代の図書館』29(3), 1991, p.177-182.
- 20) 前川和子「《座標》司書養成教育についてパート3：足元が震える未来」『図書館界』74(1), 2022, p. 1.
<https://www.nal-lib.jp/toshokankai/>
- 21) 整理研究グループから情報組織化研究グループのメンバー。グループ研究の結果であるミルズ, ジャック [ほか] 著; 田窪直規 [ほか] 訳『資料分類法の基礎理論』(日外アソシエーツ, 1997.) の出版中心人物。行動力のある勉強家として知られる。
- 22) 第11回 TP&D フォーラム：整理技術・情報管理等研究集会 2001年8月25日(土)-26日(日)
- 23) 原田勝, 田屋裕之編; 兼松芳之 [ほか執筆] 『電子図書館』(勁草書房, 1999.) で有名。原田先生は宴会では大好きな「網走番外地」を、洪い声で歌われるのをよく聴いたものでした。先生の定番でした。
- 24) 川原亜希世、中道厚子、前川和子、横山桂『図書館実習 Q&A』日本図書館協会, 2013, 97p.
- 25) 柏木隆雄 (1944-) バルザック研究者、大阪大学名誉教授、前大手前大学学長。
- 26) 深田甫 (1934-2020) ドイツ文学研究者、翻訳家、慶應義塾大学名誉教授。『ホフマン全集』を20年以上かけて翻訳出版した。
- 27) <https://savemlak.jp/>
- 28) 例えば、山本順一「“Controlled Digital Lending”を巡る動向：CDLに羽化した図書館サービス理念と米
国出版界の主張」『カレントアウェアネス』No.351, 20220320, CA2016.

【年譜】

- 1967年4月 大谷女子短期大学図書館員としてスタート。阿倍野台キャンパスで16年間
- 1967年7月 慶応義塾大学通信教育課程入学 (→ 1975年3月 卒業)
- 1983年4月 富田林キャンパスに移転。6年間 (短大図書館員 計22年間)
- 1989年4月 同キャンパスにあった大谷女子大学図書館に異動。
(4年制大学図書館員 8年間)
- 1997年4月 入試広報室に移動
- 1999年4月 堺女子短期大学司書養成課程 主任教員
- 2000年4月 大阪教育大学修士課程入学 (→ 2002年3月 修了 修士)
- 2003年4月 筑波大学博士課程入学 (→ 2012年3月 単位取得満期退学)
- 2005年4月 大谷女子大学 (現 大阪大谷大学) 司書養成課程 主任教員
- 2013年4月 大手前大学司書養成課程 主任教員
- 2018年4月 桃山学院大学博士課程入学 (→ 2020年3月 修了 博士)



Kiyo University
Faculty of Literature
Japan Library School
1955-1956, First Semester

Lib. 120: Informational and Biblio-
graphic Sources & Methods
Professor George Donn
No. 12

Unit C - FORM FOR ANALYSIS OF DICTIONARIES
辞書分析形式

In studying a dictionary the student should follow the general directions for examining reference books (Stencil 8) and should also note carefully the following points:

辞書を研究するに当たつて学生は一般の参考書を調べる通常の方法に就いて(付録 No. 8) 以下の諸点を注意し、

1. Period of the language covered
その時代の言葉が採られているか
2. Vocabulary
語彙
 - a) Extent. If words have been counted, is the count by main words only or does it include all derived and compound forms, etc.?
範囲。語彙が数にされている場合に付く主要語だけを計算したのか。それ以外の派生語や複合語も計算に入れているか?
 - b) Special elements included, e.g. slang, dialect, obsolete forms, scientific or technical terms, etc.
特殊な言葉として含まれているもの。例として俗語、方言、現在は使用されない語、科学又は技術用語等
3. Treatment of each word with reference to:
 - a) Spelling, including plurals, verb tenses, participles.
綴り。複数形、動詞の活用、分詞形
 - b) Syllabication and hyphenation
単語の綴り方(音節のつけ方)
 - c) Pronunciation
発音
 - d) Etymology
語源
 - e) History -- are changes in meaning, usage, etc. marked and dated?
了。史 -- 意味、用法、その他の変化が語示され、変化の年代が記されているか?
 - f) Definition -- is it clear, correct, adequate?
定義 -- 明確、正確、充分であるか?
 - g) Illustrative quotations -- are they given freely, with exact references, and in chronological order and dated?
意味を明確にするための引用。各方向から引用され、正確な事柄を附し、時代順に並べ、年代が示されているか?
 - h) Usage -- is a word indicated as obsolete, colloquial, etc.?
用法 -- 古語や俗語が単語示されているか?
 - i) Encyclopedic information
百科事典的(274-4-32)
 - j) Synonyms and antonyms
同義語及び反義語
4. Illustrations
挿絵
5. Abbreviations -- to what extent included, and how, i.e., in separate list or in main listing?
略語 -- どの程度まで示され、どのように示されているか。例として別表に示されているか、又は主要語彙の中に入れて示されているか?
6. Special types of words included in addition to ordinary vocabulary, i.e. Christian names, foreign phrases, biographical lists, geographical names, etc. To what extent are these included, and where -- in main listing or in appended lists?
普通語彙の他に特殊な言葉が示されているか、例として姓、外來語、人名録、地名等。どの程度まで示されているか。又それが主要語彙の中に含まれているか、別表に別表として附載されているか?
7. Special features
特徴

Based on outline in Winchell, Guide to reference books, 1951, p. 216